

[研究論文]

観光学部におけるELFプログラム

トラヴィス・コーテ[†], 大金エセル[†],
ブレット・ミリナー[‡], ポール・マクブライト[‡], 今井光子[‡]

〈要 約〉

2013年, 玉川大学では, 観光学部が設立され, 同時に全学的なELFプログラムが開始された。本稿では, ELFプログラムの概要, チューター制度, TOEIC IPスコアから見る観光学部生の状況について述べる。また, 観光学部が, 独自のカリキュラムの中でELFプログラムを如何に組み込んでいるかについても言及する。考察の結果, 当学部生は, ELFプログラムに対して肯定的な反応を示しており, 英語学習への熱意も持ち合わせているようである。2013年春学期のTOEIC IPの結果によると, 当学部の平均スコアは他学部と比べると良い結果であった。また, 更なる分析により, 海外研修のためのTOEIC目標スコア500という要素が, 英語力向上に寄与しているということが明らかになった。また, チューター制度も重要であると感じ, 活用しているという状況であった。しかしながら, 自立的に学習させていくためには, より具体的な自立学習への指導が必要であると言える。

キーワード: ELF, TOEIC, Curriculum, Tutor, Learner Autonomy

はじめに

玉川大学におけるELFは, 学生が世界各国の人々とlingua francaとしての英語を用いて効率的にコミュニケーションを図れるようになることを目標に新設されたプログラムである。Lingua francaとは, 二人の話者の第一言語が違う場合に, コミュニケーション手段として相互的に共有できる一つの言語を表している。Seidlhofer (2011)によると, 「第一言語が異なる人々との間で, 英語が意志疎通の媒体である時—ほとんどの場合, それが唯一の仲介言語である時—に使われる英語の使用法を指す」と定義付けている。ELFの教室内においても, 日本語を話す学生と, 様々な第一言語の教員との間でまさにlingua francaとしての英語が使用されている。このELFプログラムは, 今年度開設された観光学部において, とても重要な役割を担っている。

玉川大学では, 観光学に特化した学部の需要の高まりを認識し, 2013年度に観光学部が設立された。観光庁(2012)は, 観光学教育の拡大を促進しており, 日本を観光大国へと導く努力を始めている(2013)。リクナビ進学によると, 現在, 関東地区だけで, 67の大学・短大が, 観光に関する学部・学科を設置している。本学の観光学部においても, 観光社会学, 観光経営学, 観光政策・行政論, 観光関連法規, 観光経済学, アート・ツーリズム, エコ・ツーリズムなど, 多岐にわたる分野を受講す

所属: [†]観光学部観光学科, [‡]文学部比較文化学科

受領日 2014年1月6日

ることが可能である。このように、観光やそれに関連した分野の知識育成とともに lingua franca としての英語能力の向上を、観光学部では目指している。さらに、その教育を基礎に、観光業界で求められているグローバルな視野を持ち合わせた人材を育成していくことを狙いとしている。

本稿では、1) 玉川大学における ELF プログラムの概要、2) ELF プログラムが観光学部のカリキュラムに如何に組み込まれているか、3) ELF チューター制度の概要と観光学部の学生による使用状況、について述べる。

玉川大学における ELF プログラム

ELF プログラムは、学生の英語能力の向上、それに伴う TOEIC での高スコア獲得を目的として、2012年に試験的に始まった。特に、世界中の人々とのコミュニケーションを図る手段としての英語力を養うという到達目標に合わせたカリキュラムが組まれている。昨年度は、国際経営学部の国際経営学科、観光経営学科、そして、文学部比較文化学科の1年生合計436名を対象に開始された。

2013年度は、リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科、観光学部観光学科も合わせ、1、2年合計1029名の学生が受講している。この中には、工学研究科の17名、工学部ソフトウェアサイエンス学科とマネジメントサイエンス学科の7名も含まれている。また、秋学期には、14名の工学研究科の学生と、2名の工学部の学生がELFクラスの受講を継続し、高大連携プログラムの48名もELF101に加わった。2014年度には、更に芸術学部パフォーミング・アーツ学科・メディア・デザイン学科が加わり、見込み学生数は1800名となっている (Table 1)。

本プログラムでは、7名の常勤教員、19名の非常勤教員が授業を担当しており、英語を第一言語とする教員と第二言語とする教員など、その国籍は多岐に亘る。全ての教員は、高等教育機関における英語教育の経験に富み、TESOLや応用言語学の博士号、または修士号を取得している。2014年度には、常勤教員が合計9名、非常勤教員が40名まで増員される予定である。

全ての1年生は、4月の時点で、プレースメントテストとしてTOEIC Bridge¹⁾を受け、スコアによってクラス分けされる。4つのコースが開かれており、通常は101, 201, 301, 401が春学期に、102,

Table 1 Cumulative Enrolment and Required Credits in Each Year of the ELF Program

College	Departments	Required Credits	2012	2013	2014
Business Administration	International Management	16	171	321	400
	Tourism & Hospitality Mgmt.	24	108	100	100
Humanities	Comparative Cultures	24	157	320	450
	Human Science	4	0	0	90
Tourism & Hospitality	Tourism & Hospitality Mgmt.	12 (ELF 201-301)	0	108	193
Arts & Sciences	Liberal Arts	12	0	180	340
Arts	Performing Arts	8	0	0	130
	Media Design	8	0	0	90
Total			436	1,029	1,793

Table 2 Average TOEIC IP scores

Cohort	2012 Spring	2012 Fall	2013 Spring	2013 Summer	2013 Fall
2012	337 n = 414 range = 165-705	327 n = 387 range = 150-740	362 n = 393 range = 170-785		379 n = 369 range = 170-765
2013			348 n = 585 range = 170-705	380 n = 30 range = 250-480	370 n = 575 range = 155-750

Table 3 Welch's t-test Summary

	Humanities	International Management	Tourism & Hospitality
Mean	0.15	0.14	0.07
SD	0.06	0.05	0.05
t-value	7.52	7.86	3.36
p-value	0.00	0.00	0.00
N	141	156	110

202, 302, 402が秋学期に配分されている。2013年度は、夏期コースと冬期コースも設けられている。50分の授業4コマで、4単位の取得が可能である。1学期間15週の合計授業時間は50時間となり、その他1単位につき週2時間の予習・復習時間が求められている。全学生は、それぞれの学期末にTOEIC IPを受験し、スコアが成績に反映される。Table 2は2012年度・2013年度に入学した学生の平均スコアである。

2012年度からELFプログラムを開始している3学科のTOEIC IPスコア（2013年度春学期までの期間）の統計的分析結果は、有意に上昇していることを示した。Welchのt検定により、試験結果の平均値に差があるかどうかを判定した（Table 3）。この分析結果から、ELFプログラムがTOEICにおける学生の英語習熟度を高めることに寄与した可能性があると考えられる。

ELFのカリキュラムにおいては、4技能、Listening, Speaking, Reading, Writingに焦点を当て、しっかりと文法、語彙、読解力の強化を目的としている。また、速読の訓練としてExtensive Reading(多読)がカリキュラムに組み込まれている。学生は、自主学習用ドリルやテストストラテジーを活用してTOEIC IP受験に備えることが求められている。授業毎に4技能における課題や評価がなされている。評価方法は、1) 授業中の活動、出席、宿題（20%）、2) リスニング、スピーキング評価（20%）、3) リーディング（20%）、4) ライティング評価（20%）、5) TOEIC IPスコア（20%）の5項目から構成されている。各クラスは週2回開講され、両日とも同じ教員の英語による授業を受ける。クラスは少人数制で、概ね12名から24名で構成されている。

前述したELFのカリキュラム構成は、観光学部を除く全ての学部に応用されている。観光学部の学生は、卒業要件として、1年間の海外研修・TOEIC700以上の取得が挙げられている。これにより、観光学部のみELFカリキュラムは、要件に合うように一部変えて編成されている。

観光学部における英語学習

2013年度、観光学部の入学者数は108名であった。学生は、月曜日に2コマ、火曜日と水曜日に1

コマの週3回ELFを受講している。クラスは比較的少人数であり、約12名から16名で構成されている。木曜日は、学生が自主的に学習できるよう、2コマ分のEST (English Study Time) セッションが設けられている。現在、3つのESTグループがあり、それぞれ、ELFの教員により進行されている。通常の授業と異なり、ESTセッションは1グループが約26名から44名の学生により構成されている。金曜日には、全学生がTOEIC受験対策のコース(2単位)を受ける必要がある。18名から29名で構成される4つのクラスは、ELF教員と観光学部の教員が担当している。このように、観光学部の学生は、週5日間英語の「シャワー」を浴びていることになる。

観光学部生によるEFLプログラム評価

2013年度春学期末に、ELFプログラムを受講している全学生を対象にアンケート調査を行い、観光学部の回収率(95%, 105名中100名)は高かった(Table 4)。ELFプログラムに満足しているか、という問いに対して、82名の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」と回答した。プログラムの目的や目標を理解しているかという問いに対して、77名の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」と答えた。また、92名の学生が、このプログラムにおいて、新しいことを学んだと回答した。自由記述の問いにおいて、書かれたコメントや提案、質問を分析すると、半数以上(54名)の学生が肯定的なコメントを書いていた。例としては、「ELFのおかげで大学に入ってから毎日英語に触れる機会ができた。(Thanks to the ELF program, I'm able to use English everyday.)」²⁾ というものや、「英語に触れている時間が多くなって、少しずつ慣れてきて良かった。(Because I have more opportunities to use English now, I've been able to slowly improve, which is great.)」などが挙げられる。また、英語で書かれたコメントでは、「I didn't speak English in high school. But ELF is only speak English. Not use Japanese. So I speak English well.」というものがあつた。少数派の意見として、不支持の声も上がっていたが、大多数の学生がEFLプログラムを支持し、満足しているという結果であつた。

Table 4 CTH Student Responses to 2013 ELF End-of-Spring-Semester Questionnaire (n=100)

Questionnaire Item	Strongly Agree	Agree	Neutral	Disagree
1. I'm satisfied with the ELF Program.	37	45	15	3
2. I understand the purpose and goals of this ELF Program.	22	55	20	3
3. I learned new things in this ELF Program.	45	47	6	2

観光学部生のESTセッション評価

ESTセッションに関する学生の評価としては、あまり肯定的であるとは言えない。春学期・秋学期とも、2コマのESTのうち、1コマは自主学習、1コマはチューター指導によるアクティビティが行われた。春学期の参加率は、72%であり、1名の学生は一度も参加せず、18名の学生の参加回数が全体の半分以下であった。しかし、秋学期に入ると、参加率（11月14日現在）は、大幅に落ち込み、42%であった。19名の学生は一度も参加せず、33名の学生が半数以下の参加であった。この結果から、ESTセッションに関しては、見直しと改革が必須であると言える。

2013年11月に行われたESTセッションに関するオンライン調査（回収率68%、103名中70名）により、学生の評価を考察した。ESTセッションが有意義なものであるかどうかという問いに対し、22名のみが肯定的な評価をした。14名の学生が、不支持であると回答し、約半数の34名が、自分の学習に役立っていないと答えた。

学生が、ESTセッションをどのように改善したらよりニーズに合うと考えているかを調査した。大多数の53名が2コマ分のESTを両方とも自習に使うという方法を好むと答えた。記述形式で改善点を問う設問でも、14名の学生が自由に勉強することを希望するという内容のコメントを書いた。代表的なものとして、「自習したい。*(I want free study time.)*」、「勉強だけでよかった。*(It would be better if we could just study.)*」、「2時間自習になるとうれしい 単位がほしい。*(Two periods of self-study is best for me and I want to get credit for it.)*」などが挙げられる。ESTに関する全体的なコメントの箇所にも、更に5名の学生が個々人で進める学習形態を好むと回答した。

その他、ESTのスケジュールに関するコメントも見られた。午前中の授業を受講した後、学生は2時間分待ってからESTセッションへ向かうというスケジュールになっている。ある学生は、「ESTの時間を取ることは自分のためになるので良いと考えるが、もう少し時間を考慮してほしい。例えば、空き時間を長いときにその時間をESTの時間をする事など。*(Although I understand that EST sessions are supporting my learning, I feel the timetable needs to be considered more carefully. For example, including EST time in areas where we have gaps in our current timetable.)*」とコメントしている。2013年度は、ESTのスケジュールが学生にとって不都合なものであったが、2014年度には、それが改善され、1、2年生ともに観光学部のホームルーム直後に設定される予定である。

改善を求める声がある一方、他の学生にとっては、ニーズに合っていたことがアンケートから分かる。4分の1の学生は、ESTセッションに満足または大変満足だったと答えている。その中には、「先生に質問することができるので便利だと思う。*(Having the opportunity to ask teachers questions directly is convenient.)*」というコメントや、英語で書かれた「*EST is very good times.*」などが含まれていた。

ESTの形態に関しては、クラス数を増やすことによって改善されると考えられる。現在の3クラスから4クラスに変えると、1クラスが25名程度に収まり、チューターによる、より個々に合った指導が見込まれる。セッション中に何を行うかに関しては、慎重な計画が必要である。チューター指導によるアクティビティを好む学生もいれば、自主学習を支持する学生もいるという現状を踏まえ、例えば、オーストラリア留学を視野に入れたアクティビティなどを取り入れることにより、チューター指導のセッションも役に立っていると感じる学生が増えるのではないだろうか。

観光学部生のTOEICスコア

観光学部生入学時のTOEIC Bridgeスコアは平均127であり、TOEICに換算すると310-345³⁾の間で

ある。このスコアは、1年間に亘る海外研修時までには必須とされる500という目標スコアより約200点も下回っている。金曜日に行われている2コマ分の授業は、TOEICの試験対策に充てられており、合計すると1学期間に25時間となる。しかしながら、Saegusa (1985) は、有意なスコアの伸び率を目指すためには、100から200時間の指導が必要であると述べている。Saegusa (1985) の広範囲に及ぶ研究によると、84時間の指導を受けた学生の53%が50点以下の伸び率であり、これは誤差範囲内⁴⁾のスコアだと言える。ELFの授業合計50時間と、TOEIC対策用の設けられた25時間のCollege Englishだけでは、当学部生が必要条件の500点に達するには不十分であると考えられる。これは、観光学部のカリキュラム改革において、考慮されるべき問題である。

しかしながら、当学部生は、日本の他大学で経営を専攻している学生と習熟度テストのスコアとしては、同等であると言える。2013年度春学期後、ELFプログラムの1年生全体のスコア平均は348 (n=585) であったが、当学部生の平均スコアは415であった (Table 5)。Educational Testing Service (ETS) の2012年公開テストスコアレポートによると、商学・経済・経営系を専攻する日本の大学生の平均は422、その中で1年生の平均を見ると399であった (ETS, 2012)。学期末のアンケート調査によると、当学部生の多く (95名) は、TOEIC受験という目標はELFにおいて有意義であると回答している。

また、観光学部生は、他学部生に比べると成績が伸びていると考えられる。ANOVAとTukey HSD法の分析結果によると (Table 6)、国際経営学部とリベラルアーツ学部以外のTOEICスコア平均に有意差が見られた。春学期終了後、観光学部の平均スコアは415に達し、他学部に比べ、はるかに高い

Table 5 Average TOEIC Bridge and TOEIC IP Scores of First-year Students in 2013

TOEIC	Date	Tourism & Hospitality	Humanities	Arts & Sciences	Business Administration	All Colleges
TOEIC Bridge	April 2013	127 n = 108	124 n = 162	116 n = 178	113 n = 159	119 n = 607
TOEIC IP	July 2013	415 n = 103	352 n = 159	324 n = 173	319 n = 150	348 n = 585
TOEIC IP	Dec 2013	460 n = 98	382 n = 156	350 n = 171	323 n = 150	370 n = 575
TOEIC IP & SP	Dec 2013	499 n = 103				

Table 6 ANOVA Summary (n=585)

Source	SS	df	MS	F	P
Between Groups	711019.8	3	237006.6	28.91	<.0001
Error	47622542.4	581	8197.1		
Total	5473562.3	584			

Tukey HSD

(Humanities = M1, Business = M2, Liberal Arts = M3, Tourism = M4)

M1 vs M2 p<.01 M2 vs M3 non significant

M1 vs M3 p<.01 M2 vs M4 p<.01

M1 vs M4 p<.01 M3 vs M4 p<.01

スコアであった。さらに、TOEIC IPまたはTOEIC SP（公開テスト）の最高スコアの平均を計算すると499となり、当学部生がTOEICにおいて向上していると考えうる。

また、更なる分析により、TOEIC500という目標スコアを定めていることが、学生のモチベーションとして良い効果を生み出していることが分かった。当学部生のELF春学期の成績と、春学期のTOEIC IPスコア、TOEIC500という必須条件の関係性に対し、回帰分析を行った。その結果、TOEIC IPスコア500という目標は、ELFの成績との繋がりより、TOEICスコア獲得との繋がりの方が、強かった（Table 7）。つまり、TOEIC目標点500という条件が、ELFの成績に与えた影響より、実際のTOEICスコア向上に与えた影響の方が大きかったと言える。

Table 7 Results of the Regression Analysis (n=588)

	Interc	BD	AAD	F	Adjusted R ²
Model	222.6*** (25.67)	85.1*** (9.38)	48.1*** (14.0)	0	0.34

Yscore: TOEIC Score

BD: Benchmark Dummy (If there is a benchmark, TOEIC score is 1, otherwise TOEIC score is 0)

AAD: Academic Achievement Dummy (Dummy variable of Academic Achievement, S=4, A=3, B=2, C=1, F=0)

* Significant at the 10% level, two-tailed test

** Significant at the 5% level, two-tailed test

*** Significant at the 1% level, two-tailed test

観光学部生のTOEIC平均スコア上昇に寄与していると考えられる他の理由には、週3日のELFプログラムのうち、金曜日の2コマをTOEIC対策に充てていることと、海外研修プログラムへ参加するという意識、最低700を越えるという卒業条件という外的要因があると考えられる。また、ELFチューター制度もそれに貢献していると言える。

ELF チューター制度

玉川大学の12の教育信条の3—自学自立—に基づき、2013年度からELFプログラムの一環としてチューター制度が開始された。これは、授業以外でも学生が英語学習にアクセスでき、サポートを受けられるようにと考えられた制度である。ELFプログラムの全ての学生が利用できるよう、「チューターゾーン」では、2名の常勤講師が、スケジュール等を管理し、12名の非常勤講師によって、指導が行われている。週に4日、11時から16時まで組まれており、それぞれのチューターは50分のセッションを1コマ、または2コマ担当している。1コマにつき、3枠の予約が取れるように設定されているため、合計すると週に78枠⁵⁾となる。学生は15分1枠（複数予約可）の予約を担当教員による推薦で利用するか、直接予約シートに名前を書き込んで予約する。チューターによる指導として行われているのは、試験や小テストの復習、プレゼンテーションの練習、TOEIC対策、教科書のサポート、extensive reading（多読）のサポート、ブラックボードサポート、文法、Listening・Speaking練習、発音練習、Eラーニングサポートなどである。

観光学部生の利用状況について、チューター担当教員が行っているオンライン記録簿により分析した。春学期の利用された時間枠400のうち、133枠が当学部生であり、ほぼ3分の1を占めていたと言える（Table 8）。ELFプログラム全体の学生数が1029名であり、そのうち当学部生は10%に当たる108名となっていることを考えると、かなり高い割合でチューター制度を利用していることを示している。また、その記録簿から、当学部生全体のうちの75名（71%）がこの制度を利用したというこ

とが分かった。

Table 8 Tutor Visits by Students in Spring Semester, 2013

College	Students	Percentage of ELF population	Tutor Visits	Percentage of Total Visits
Business	421	41	165	41
Tourism	108	11	133	33
Humanities	320	31	67	17
Liberal Arts	180	17	35	9
Total	1,029	100	400	100

前述した学生による学期末アンケートでも、69名の学生が、チューター制度を利用したと報告している。そのうち、大多数である62名の学生が、自分の学習に役立ったと回答している (Table 9)。コメントの例としては、「とても良い制度だと思います。今後はもっと利用していきたいです。(It is a very good system. I want to utilize it more from now on.)」というものや、「文章を直してもらったり、発音を教えてもらい、とても役に立った。(The tutor was very helpful correcting my essay and pronunciation.)」という構文や発音に関する指導に満足したものなどが見られた。

Table 9 CTH Student Perceptions of the EST Sessions

Questionnaire Item	Strongly Agree	Agree	Neutral	Disagree	Strongly Disagree
1. Tutor experiences were useful. (n=75)	29	33	11	1	1
2. The tutor schedule was convenient. (n=99)	13	33	37	12	4

しかし、何人かの学生は、チューターのスケジュール体制に不満を感じていたようだ。チューター制度が利用しやすいものであったかどうかという質問に対して、16名の学生が、「そうは思わない・全くそうは思わない」という回答を選んでおり、37名の学生は無回答であった。自由記述の問いでは、不満を感じている内容が書かれているものも見られた。中には、「教室数を増やしてほしい。(Please open more tutor rooms.)」というものや、「I often didn't go to Tutor. Because, time didn't suit easily, so I want to more time have offered. あまり私はチューターのところへ行かなかった。なぜなら時間が合わなかったから。なので、もっと開講してほしい。」というものが含まれていた。特に、多くの学生が要望していた内容としては、よりチューター制度の時間帯を拡大し、午前中にも利用できるようにしてほしいというものであった。観光学部のELFクラスが午前に設定されており、場所もチューター制度と同じ建物であることを考えると当然の要求であると考えられる。

観光学部生のチューター制度使用状況を、チューター出席記録簿により分析した。それによると、当学部生のチューター制度利用目的は、多種多様であることが分かった (Table 10)。プレゼンテーションの練習、ライティング指導、TOEIC対策、リスニング・スピーキング練習が多く見られた。中でも、プレゼンテーションの練習 (60回) がチュータールームを訪問する理由として一番多かった。ただし、一人の教員が、プレゼンテーション前にチューターから指導を受けるよう指示したことが起因した可能性も明記されるべき点である。

Table 10 CTH Student Visits to Tutors in Spring Semester 2013

Reason	Number of Tutor Visits
Presentation Practice	60
Writing	31
TOEIC Study	27
Listening and Speaking Practice	12
Extensive Reading Support	11
Textbook Support	4
Grammar Review	3
Other	1
Total	133

記録簿による分析結果から見える問題点として、自発的にチューター制度を利用した学生は比較的少なかったということである。チューター制度は、学生が自学学習のためにサポートを受けるよう設けられている。しかしながら、記録簿によると、133回記録されたチューター利用のうち、90回が教員から指示書（referral sheet）による利用で、学生が自ら行ったものではなかった。さらに、2度以上チュータールームへ行った学生の状況を分析すると、58回中40回（69%）が、また教員による指導で利用しており、自発的行動ではなかった。チューター制度を学生に紹介するという点で、教員の果たす役割は大きいですが、本来ならば自立学習のための制度にも拘らず、自立的にチューター制度を活用するという姿勢はあまり見られなかった。

観光学部の学生は、英語に関する卒業要件を考慮すると、より自主的に学修に取り組む必要がある。当学部生からチューター利用時間の拡大の声が上がっているにも拘らず、大多数の学生は、自らチューターを利用してはいない。また、秋学期にはチューター利用回数が減っていることが分かる（Table 11）。さらに、春学期末のアンケートによると、授業のために予習・復習を十分行ったかという問いに対して、「そう思う・大いにそう思う」と回答した学生は、予習が42名、復習が34名のみであった。

Serag (2013) と Stotts and Oguri (2013) の研究によると、日本の高等教育を受けている学生は、自立した学習という認識が欠如しているとの考察をしている。これが、観光学部の学生が自発的にチューターを利用せず、予習・復習も十分に行わない一つの原因であるかもしれない。Gardner and Miller (1999) は、教育現場において、自立的に学習することの意義を教えることと同時に、自立学習という環境に学生を曝すことを支持している。今後のプログラム改善としては、ESTの時間やELFの授業時に、学生がより自立的に学習するよう促していく必要があり、さらには、チューター制度を利用して具体的にどのように学習を進めていくべきなのかを提示することが考えられる。当学部生の自立性を高める教育と、様々な学習方法を提示することにより、オーストラリアでの海外研修の準備へと繋げることができるであろう。

Table 11 CTH Student Visits to Tutors in September and November, 2013

College	Students	Tutor Visits	Percentage of Total Visits
Business	421	89	40.45
Tourism	108	44	20.00
Humanities	320	53	24.09
Liberal Arts	180	34	15.45
Total	1,029	220	100.00

おわりに

2013年度における観光学部の学生は、期待できるスタートを切り、ELFプログラムにおいても、高度な基準を設けたという点で、新観光学部生の良い見本となっていると言える。TOEICのスコアは徐々に上がっている上、ELFの授業にも満足しているようである。しかし、問題点としては、チューター記録簿からも分かる通り、内発的動機と行動力に欠けているということである。さらには、ESTとチューター制度のシステムや内容にも再考の必要が出てきた。今後のプログラムの改善点としては、学生が英語力を向上させていく上で重要な、より細やかな自立性への指導を行い、それにより、自らが責任を持って学習を進めていくことができるような人間を育てることである。

[謝辞]

本稿のTOEICスコア統計分析にご協力いただきました観光学部小林直樹先生に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 2012年度のTOEIC Bridgeスコア平均は124（学生数 = 434；分布範囲 72-170）であり、2013年度は119（学生数 = 607；分布範囲 50-176）であった。
- 2) 学生のコメントは筆者によって訳されている。
- 3) The Educational Testing Service (ETS) TOEIC Bridge and TOEIC Scoreのチャートによると、TOEIC Bridge120-130がTOEICの310-345に相当すると示されている。
- 4) ETSの標準誤差報告によると、TOEICのListeningとReadingのセクションともに、25としている。
- 5) 2013年度の秋学期は78枠、春学期は72枠であった。

参考文献

- ETS. (2012). *TOEIC® Program: Data and Analysis 2012*. Retrieved from http://www.toEIC.or.jp/library/toEIC_data/toEIC_en/pdf/data/TOEIC_Program_DAA2012.pdf
- ETS. (2006). *TOEIC® Test Comparisons Chart*. Retrieved from http://www.ets.org/Media/Tests/TOEIC/pdf/ToEICBridge_Cmprsn.pdf
- ETS. (n.d.). *TOEIC® User Guide. Listening and Reading*. Retrieved from http://www.ets.org/Media/Tests/Test_of_English_for_International_Communication/TOEIC_User_Gd.pdf
- Gardner, D., & Miller, L. (1999). *Establishing Self-Access: From theory to practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- JTA. (2012). *White Paper on Tourism, 2012*. Retrieved from <http://www.mlit.go.jp/common/000221177.pdf>
- JTA. (2013). *White Paper on Tourism, 2013*. Retrieved from <http://www.mlit.go.jp/common/001018364.pdf>
- Rikunabi Shingaku. (n.d.). 観光学／大学・短期大学（短大）[関東] 学部学科検索結果一覧. Retrieved from http://shingakunet.com/gakumon-search/shiko_cd010/gakumon_c1020/?areaCd=03&koshuL=daitan&pn=4
- Saegusa, Y. (1985). Prediction of English Proficiency Progress. *Musashino English and American Literature*, 18, 65-85.
- Seidlhofer, B. (2011). *Understanding English as a Lingua Franca*. Oxford, UK: Oxford University Press.

- Serag, A. (2013). Self-access language learning: Japanese autonomy. In N. Sonda & A. Krause (Eds.), *JALT2012 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.
- Stotts, A. & Oguri, S. (2013). Self-access rooms: Accountability and mentoring. In N. Sonda & A. Krause (Eds.), *JALT2012 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.
- Zenjin. (2013). 観光産業が求める人材と今後の観光教育. *Zenjin*, 11, 777, 4-5.

(トラヴィス・コーテ)
(おおがね エセル)
(ブレット・ミリナー)
(ポール・マクブライト)
(いまい みつこ)